◇牧師室より◇

多木浩二氏の「戦争論」は、第一次世界大戦からユーゴ空爆までの諸々の戦争を「人間」という視点から捉え直している。まず、戦場の兵士は人殺しの機械にさせられる。貧しい半農民・半労働者の父親が戦車兵として借り出されコソヴォに向かった。NATOの空爆に対する報復として、村の30人ほどの女と子供を撃ち殺すのを見て、気が狂ったようになった。相棒は「妻や子供のことを思ってみろ。それにあれは君のしたことではないぜ」と言ってくれた。しかし、彼は「頭はなにも考えなくなり、なにも感じなくなった。植物になったみたいだ」と述懐している。人間性が失われる瞬間を経験したのである。日本は明治6年に徴兵令が出され、軍隊国家として出発した。その軍隊は思考停止の教育と訓練で、天皇の命令に反射的に反応する軍隊となった。多木氏は「奴隷の軍隊」と評している。それが南京で「人斬り」や「強姦」を手柄話にし、玉砕を美談にした。アウシュヴィッツでは、ナチ親衛隊は粛々とユダヤ人をガス室で殺し焼却炉で抹殺していった。彼らは、罪意識は全くなく家庭ではごく普通の良き父親であったという。戦争は「人間をモノと見る」非人間化を頑固に内包している。

多木氏はユーゴへのNATO空爆は新たなタイプの戦争であるという。経済や文化のグローバル化は言いつくされているが、アメリカを中心としたグローバルで、巨大なハイテク軍備が世界に配備されている。国民国家の戦争であった「近代戦争」から「あらたな帝国」が仕切る20世紀末の戦争である。更に、過剰軍備は消費・消耗を合目的化しつつある。日本はこの帝国の武力行使を伴う後方支援の法整備をした。多木氏はハイテク戦争への想像力の欠落を指摘している。思想や芸術を含む慎ましい日常性が歴史と社会を形成する。それを真っ向から打ち砕く戦争という暴力にどのように対するのか。現実主義者と称する人はあざ笑うだろうが、事実を知り現実を洞察し、「永久平和」の理念を追い求めよう、と結んでいる。

週　　報

2000年2月20日　降誕節第9主日

巻20　47号

1999年度　教会主題

「互いに仕え合う」

聖　句　兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせずに、愛によって互いに仕えなさい。

ガラテヤの信徒への手紙　5章13節

目　標　1．生活を整えて礼拝、諸集会を守る。
2．キリストの体なる教会形成に参与する。
3．教会創立20周年記念に備える。

日本キリスト教団　**横浜港南台教会**

横浜市港南区港南台7丁目8−29
郵便番号　234−0054
電　　話　045−833−5323
F A X　045−833−6616
振　　替　00290−4−13994

牧師　秋吉隆雄